

[成果情報名] ディサ株分け苗の生育・開花特性

[要約] ディサの株分け苗は、無機質の用土及び肥料を用いて、夏期の育苗を高標高地で行えば生存株率が高く、秋冬期の夜温を2~5 で管理すれば、株分け1年後の4~6月に開花する。

[キーワード] ディサ、株分け苗、夏期育苗、秋冬期

[担当] 山梨総農試・高冷地分場・八ヶ岳試験地

[連絡先] 電話0551-46-2929、電子メール koureichi@pref.yamanashi.lg.jp

[区分]

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

ディサ属植物は、南アフリカの標高700~2,200mの地域に自生するランで、約130種の原種がある。本属は生育・開花に適した栽培条件が明らかでなく、本格的な営利栽培は行われていない。本県のオリジナル品目として産地化を図るため、ディサ鉢物栽培の適地の選定、ベンチ栽培での管理方法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

(1)ディサ鉢物栽培において株分け苗の夏期の育苗場所は、標高300~950mで比較すると標高が高い950mが適している(表1)。

(2)鉢用土は、軽石と鹿沼土を等量混合した用土が調整ピートより適している(表2)。

(3)夏期のかん水回数は、1日1回より1日2回のかん水が適している(表2)。

(4)肥料は、無機質の肥料がよい(表3)。

(5)秋冬期の夜温は、2~5 で栽培が可能である(表3)。

(6)以上の管理方法で育苗した株は株分け翌年の4~6月に開花する(表3)。

[成果の活用面・留意点]

1. 秋冬期の昼温は25 を目標に換気する。

2. 夏期育苗は夜温20 を上回らないような場所が適する。

3. 秋冬期のかん水は1日1回行う。

4. 冬期における中途昇温(2 15)管理を行うと開花促進効果があるが、品種間差がある。

[具体的データ]

表 1 標高の異なる栽培場所が株の生存に及ぼす影響

標高 (栽培場所)	生存株率 (%)	日最高・最低気温の月平均値 ()			
		7月	8月	9月	
標高955m (高根)	91.4	最高	26.6±4.6	31.9±2.2	24.2±4.0
		最低	18.9±1.7	19.7±1.1	10.4±3.8
標高747m (明野)	50.0	最高	30.3±2.5	29.2±2.3	24.6±2.7
		最低	19.1±2.3	20.4±0.8	17.3±1.4
標高312m (双葉)	0	最高	34.5±2.8	33.1±2.6	28.2±3.0
		最低	24.1±2.5	22.4±0.9	18.3±1.8

品種：ケウエンシス

表 2 夏期のかん水回数と用土の種類が株の生存に及ぼす影響

品 種	かん水回数 (回/日)	用 土	生存株率 (%)
ケウエンシス	2	軽石 + 鹿沼土	91.4
		調整ピート	41.9
	1	軽石 + 鹿沼土	79.6
		調整ピート	41.7
ユニフローラ	2	軽石 + 鹿沼土	89.5
		調整ピート	72.2
	1	軽石 + 鹿沼土	74.1
		調整ピート	50.0

施肥：ハイドレックス(20-20-20)5,000倍を2週間に1回かん水時に施用

表 3 秋冬期の加温と肥料の種類が開花に及ぼす影響

品 種	最低気温 ()	肥料	生存株率 (%)	開花日 (月/日)	花茎長 (cm)	小花数 (輪)
ケウエンシス	2	有機	90.0	4/29	54.6	17.7
		無機	100	4/27	54.8	17.7
	5	有機	75.0	4/21	53.2	15.6
		無機	100	4/22	53.7	16.3
ユニフローラ	2	有機	65.0	6/13	25.8	5.5
		無機	90.0	6/8	36.3	8.1
	5	有機	10.0	6/13	23.0	7.0
		無機	70.0	6/9	28.4	8.9

肥料：有機はなたね油粕を毎月1回3g置き肥、無機はマグアンプKを6か月に1回15g置き肥

用土：軽石と鹿沼土の等量混合 かん水：毎日1回手かん水

[その他]

研究課題名：高冷地における洋ラン類の生産安定技術

ディサの生産安定技術

予算区分：県単

研究期間：1998～2003年度

研究担当者：堀内浩明、長谷川茂人、加藤肇、小森照彦

発表論文等：小森(2003)山梨総農試研報12:37-41.

小森ら(2004)生環調42(4):349-352